



平成24年度研究助成 【音楽振興部門】より

「日本電子音楽の特質～60年の歴史検証を通して～」研究の目的

東京藝術大学音楽学部

音楽環境創造科 教授 西岡 龍彦

今年10月、創立125周年を迎えた東京藝術大学では、アジアと日本の芸術系大学の学長が一同に会する「藝大アーツ・サミット2012」が催されました。これは、2007年からアジアとのさまざまな連携活動を行ってきた藝大のプロジェクトの集大成で、「アジアから世界へー連携と共生ー」というテーマが設定され、アジアにおける芸術の独創的展開、およびアジアの芸術の今後の連携の在り方について意見を交わし、次世代の教育と芸術文化の発展のために今後さらに交流を深めることが確認されました。

2007年から始まったこのプロジェクトの期間中に、コンピュータミュージックの創作と研究を行っている私の研究室でも、アジアの国々と電子音楽に関する交流を行ってきました。中国では、北京の中央音楽学院が主催した「World Music Days 中国・日本」や中央音楽学院の電子音楽部門が主催する「MUSICACOUSTICA BEIJING」に参加して日本の電子音楽や学生の作品を紹介したり、北京から作曲家、演奏家を招いて藝大の千住キャンパスで伝統楽器によるライブ・エレクトロニクス作品のコンサートやレクチャーを企画しました。

また韓国では、ソウル大学、韓国芸術総合学校への視察や、電子音楽関係の施設としてもっとも規模が大きいと言われる漢陽大学で、

藝大の学生と教員の作品によるコンサートも行いました。今年度は、電子音楽の専攻を持つ台湾の大学視察を計画しています。

このような中国や韓国の電子音楽を通じた交流から感じたのは、ヨーロッパやアメリカですでに有効に活用されている電子音楽のネットワークが、アジアの大学や研究所、協会間にはなく、そのために組織的な人的交流や情報の共有、共同研究、共同制作が難しいということでした。また、ヨーロッパを源流とする電子音楽のアジアでの受容が国によってかなり異なるので、それについても調査・研究をしたいと思い、まず、日本の電子音楽の特質について、歴史的に検証



2008年北京 MUSICACOUSTICA BEIJING
コンサートリハーサル

しなければならぬと考えました。

20世紀半ばにヨーロッパで始まったミュージックコンクレートや電子音楽は、即座に多くの作曲家の関心を集め、日本でも1950年代初めにNHK電子音楽スタジオやホール音響施設などを利用してさまざまな作品が生み出されています。これらの初期の作品制作に共通するのは、放送局やスタジオなどの大がかりな音響機器を使うこと、音響技術者と協力して制作すること、アナログテープを利用することです。1967年は東京藝術大学に音響研究室が設立された年ですが、アナログシンセサイザの発明によって大がかりな音響機器を必要としなくなったことや民



2010年12月 藝大千住キャンパス 朱詩家氏のライブエレクトロ作品「箏と電子音のための《箏声夜話》」リハーサル

生のマルチテープレコーダーの発売などが背景となって、いくつかの大学でも電子音楽の研究や創作が始まりました。電子音楽の制作の場が放送局などの施設から大学、そして自宅へと変わっていく時代です。その後のデジタル技術の発達で音楽制作の方法は根本的に新しい時代になるのですが、ここまでの日本の電子音楽が体験した約30年間の制作方法は、中国や韓国ではあまり経験されることはありませんでした。政治的な理由が大きいのですが、このような経験の違いは、両国の現在のコンピュータミュージックにもなんらかの影響を与えているかもしれません。台湾ではまた事情が異なるのですが、これらの国々を中心に、さらに多くのアジアの歴史的な電子音楽の事情を政治的、産業的な背景から比較していきたいと思っています。

2006年にスタートした大学院音楽音響創造分野の私の研究室では、これまでに20の修士論文が提出されましたが、日本の電子音楽に関するものとして「日本におけるライブ・エレクトロニクスミュージックの諸相」「日本の電子音楽創成期～東京藝術大学音響研究室の活動～」「湯浅譲二作品研究―声を素材とした作品を中心に」があり、それ以外にも「集団即興演奏～戦後の現代音楽における集団即興演奏の方法論～」「マルチメディア作品における音楽―実験工房と草月アートセンターを中心に―」などで

は、いくらか電子音楽に関する記述も見られます。韓国からの留学生は、「日本・韓国における電子音楽の比較研究」という本年度提出する修士論文を書いています。

パリ大学のMarc Battier教授によるアジアの電子音楽の研究やアーカイヴが進行中ですが、必要なのは、それぞれの国の作曲家や研究者が自国の電子音楽を研究しその成果や作品の情報を共有して、それを次の研究や創作につなげて行く事です。アジアの電子音楽ネットワークが構築されれば、ヨーロッパやアメリカ、北欧などの世界のネットワークとつながり、世界的な電子音楽の創作や研究が加速することになります。各国の個性的な伝統文化と先進のテクノロジーで表現されるアジアの電子音楽にはさまざまな可能性があります。我々の課題は、未だ不十分な日本の電子音楽の研究を行い、その成果を蓄積し、情報交換が容易にできるように国内のネットワークを構築して、次世代の作曲家や



2011年3月 ソウル大学電子音楽スタジオ
Lee, Don Oung教授と

研究者がアジアの国々と連携事業や共同研究ができる基盤を作ることです。

カワイサウンド技術・音楽振興財団から受けた助成によって、来年3月には「日本の電子音楽の特質と歴史」をテーマにした研究発表とシンポジウムが実現します。このような企画の積み重ねによって、日本の電子音楽研究が少しでも前進するように努力していきたいと思っています。